

大学生による知的障害成人女性とのコミュニケーションスキル促進に関する研究

本間 美咲

I. 問題と目的

近年, AAC の概念が広がり, コミュニケーションの手段としてサイン言語や「P&P」(黒田・東・津田, 2002), 絵カード, VOCA などを使用することが多く見られるようになり, それぞれの対象児・者に適した指導が行われている。

AAC 手段の指導を行うにあたり, 黒田ら (2002) は, 知的障害のある児・者については, それぞれの認知発達レベルなどに応じて, 適切な AAC 手段を選択していく必要があると述べている。しかし, 対象児・者の認知発達レベルによっては AAC をコミュニケーション手段として活用することが難しい場合もある。

ところで, 障害者の就労において, 「人間関係」が離職原因の 1 つとなっている (障害者職業総合センター, 2007)。そんな中, わが国では, 障害者基本法の改正, 障害者差別解消法の成立といった国内法の整備が進められ, 平成 25 年に障害者権利条約を批准した。

これらより, 合理的配慮は教育機関はもとより, 学校卒業後の社会においても行われるべきものとなった。合理的配慮の視点から, 今後は障害のない人たちが障害のある人たちと関わるために必要なスキルを知る, あるいは身に付けることが必要となってくると考えられる。

しかし, コミュニケーション指導の対象は, 障害のある人たちに対して行われているものが多い。だが, コミュニケーションは相互のやりとりであるため, 今後は健常者にもスキルが必要となるろう。

そこで本研究では, 健常者と障害者のコミュニケーションを豊かにするために, 健常者に必要なコミュニケーションスキルを「テキスト」という形で教示することで, 障害者とのコミュニケーションが促進されるのかを明らかにすることを目的とする。

II. 方法

1. 参加者

参加者は, N 大学 K 学部 T 専修に在籍する大学 1 年生の女性 A 氏と B 氏であった。両者ともに, 小学校または中学校に特別支援学級在籍の子はいたが, 関わった経験はほとんどなかった。

また協力者として, 知的障害をもつ 24 歳成人女性 C 氏と N 大学 K 学部 T 専修に在籍する大学 4 年生の女性 D 氏にも参加してもらった。

C 氏について, 24 歳 8 ヶ月時に行った Vineland-II 適応行動尺度の結果 (各領域の相当年齢) は, 受容言語は 2 歳 4 ヶ月, 表出言語は 1 歳 10 ヶ月, 読み書きは 5 歳, 身辺自立は 3 歳 9 ヶ月, 家事は 3 歳 4 ヶ月, 地域生活は 2 歳 1 ヶ月, 対人関係は 2 歳, 遊びと余暇は 2 歳 4 ヶ月, コーピングスキルは 5 歳 9 ヶ月であった。なお, 運動スキルの 2 領域については基準をクリアしていた。コミュニケーションは, 話すことが主であるが身振りも交えて行っていた。

D 氏は, 特別支援学校での実習を 2 回経験しており, ボランティア等でも障害者に関わった経験が多くあった。

2. C 氏のコミュニケーション行動の実態

(20XX 年 3 月～6 月の 4 ヶ月間)

C 氏が家族以外の人, また家族の人とどのようなコミュニケーションをとっているのかを明らかにするため, 作業所の担当者とのやりとり及び家族の人とのやりとりをビデオカメラで撮影した。そのビデオ記録から, 会話を黄 (2002) が用いた定義に従い, 以下のように分類した。

発話数: 1 つの文は 1 つの発話 (例: 貼る?) とした。複数の文でも接続詞を使って 1 つの文になっている場合は 1 つの発話 (例: おしまいだから片付けよう) とした。また, 話しているときにポーズがあれば 1 つの発話とした。よって次の例は 2 つの発話とした (例: 「あっ」「ポーズ」「これ使って」)。

C氏の会話主導権：「C氏の発話数」を「作業所の担当者の発話数および家族の人の発話数」で割ったものをC氏の会話主導権とした。2者間が同等のバランスである状態を示す数値1を基準とした。

作業所の担当者、家族の人の発話機能：作業所の担当者、家族の人の全発話を「指示」、「WH型質問」、「Yes/No型質問」、「情報」、「正評価」、「負評価」、「応答」、「その他」の8つに分類した。

結果、作業所の担当者の発話機能は、「指示」または「その他」の機能が強く、家族の人の発話機能は、「Yes/No型質問」・「正評価」および「その他」の機能が強いことが明らかになった。また、対作業所の担当者よりも対家族の人とのやりとりの方がC氏の発話数は多かった。

3. コミュニケーションテキストの作成および作成したテキストの妥当性

(20XX年6月～8月の3ヶ月間、20XX年9月の第1週)

前項で明らかとなったC氏のコミュニケーション行動の実態を踏まえ、「C氏にどのように話したら伝わるのか」、また「C氏が返しやすくなるのか」、「C氏の好きなものや興味のあるものは何か」、家族の人の発話機能のうち「その他」に分類された発話は、どのように使われているのか、また「それを使うとC氏はどのような反応するのか」等を分析した。

この分析をもとに、C氏と関わる上で大切な「質問」、「ほめる」、「確認」、「理解する・伝える」の4項目をテキストに記した。

テキスト作成後、作成したテキストの妥当性を調べるため、参加者D氏とC氏にカード作りを行ってもらい、その会話の様子を評価した。評価にはABデザインを用いた。1試行を3分間と設定し、1日5試行ずつ行い、これを計3回行った。D氏には2日目からテキストを提供し、ベースライン期の1日目と介入期の2日目の間は3日空けた。C氏とD氏の会話のやりとりをビデオカメラで撮影し、前項に記した黄(2002)が用いた定義に基づき分類を行った。

C氏の発話数はD氏にテキスト提供後の2、3日目の方が多くなった(Fig.1)。また、C氏の会話主導権を示す数値も、2、3日目の方がD氏と同等のバランスである状態を示す数値1に近づいていた(Fig.2)。

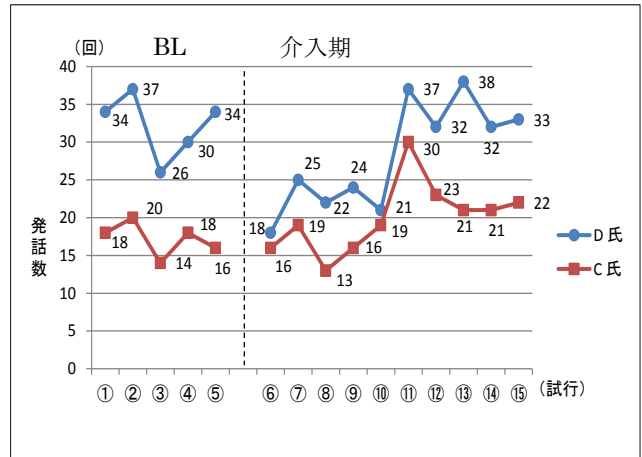


Fig.1 C氏とD氏の発話数の変化

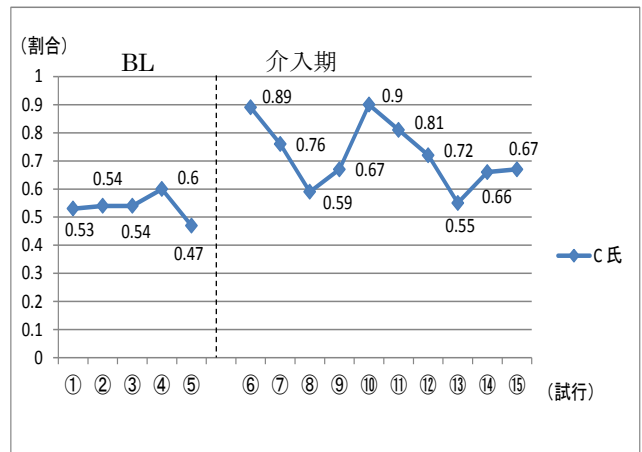


Fig.2 C氏の会話主導権の変化

これらの結果より、作成したテキストには一定の効果があり、参加者A氏とB氏に提供するテキストとして妥当であるとみなした。

4. A氏とB氏が参加した研究の手続き

筆者があらかじめ準備しておいた器具を使って、参加者1名とC氏で1枚のカードを自由に作ってもらうこととした。1試行を3分間とし、参加者は1試行ごとに交代し、それぞれ1日5試行行った。C氏には、各参加者が1試行ずつ終わるごとに5分間の休憩にした。

その間、もう1人の参加者には、別室で待機してもらった。

本研究はマルチベースラインデザインで行う

ため、A氏には2日目から、B氏には3日目からテキストを提供した。そのため、1日目は両者同じ部屋で待機、2日目はそれぞれ別々の部屋で待機、3日目は両者同じ部屋で待機してもらった。研究は20XX年9月の第2週から9月末にかけて行い、1週間おきに計3回行った。

5. データ

(1) 会話時の発話数の変化およびC氏の会話主導権の変化

カード作りの場面を撮影したビデオ記録をもとに、A氏とC氏、B氏とC氏それぞれの会話時の発話数の変化およびC氏の会話主導権の変化を分析した。分析は、項目2で記した黄(2002)の定義に従った。

(2) C氏の表情(スマイル%)の変化

本研究で使用したビデオカメラ(JVCケンウッドのEverioのGZ-E565)に内蔵されている「スマイル%機能」を用いてC氏の表情を捉えた。それぞれの各試行で表示されたスマイル%の数値のうち、最も高い値をその試行のスマイル%の最大値とし、その変化を分析した。

(3) 知的障害児(者)に対する態度調査

1日目と3日目に知的障害児(者)に対する態度について、質問紙により回答を求めた。大谷(2002)による“実践的好意”、“能力肯定”、“交流及び共同学習”(“統合教育”の次元の名称を変更)、“地域交流”、“理念的好意”の5次元の態度尺度を用いた。5次元28項目について、「そう思う」、「ややそう思う」、「どちらともいえない」、「やや思わない」、「そう思わない」のいずれか1個に○をつけ、回答はそれぞれ5、4、3、2、1として得点化した。

(4) 自由記述式のアンケート

各日それぞれ5試行終了後に回答してもらい、その記述内容を比較した。

III. 結果と考察

1. 会話時の発話数の変化およびC氏の会話主導権の変化

A氏とB氏の発話数の変化をFig.3、Cさん

の発話数の変化をFig.4、C氏の会話主導権の変化をFig.5に示した。C氏の発話数は、介入期の方が多くなり、A氏とB氏の発話数も増加した。また、C氏の会話主導権を示す数値も介入期の方が数値1に近い値となった。

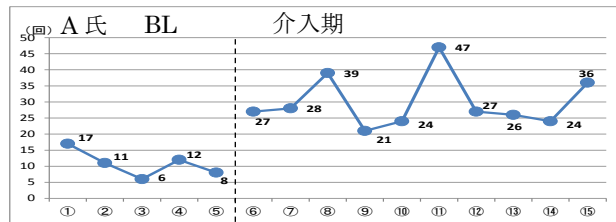


Fig.3 A氏とB氏の発話数の変化

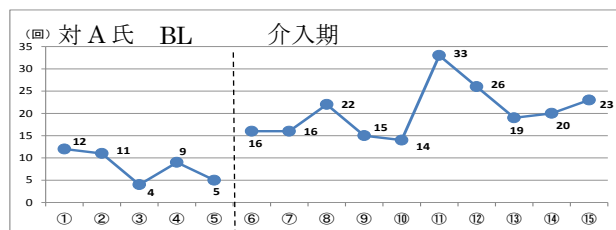


Fig.4 C氏の発話数の変化

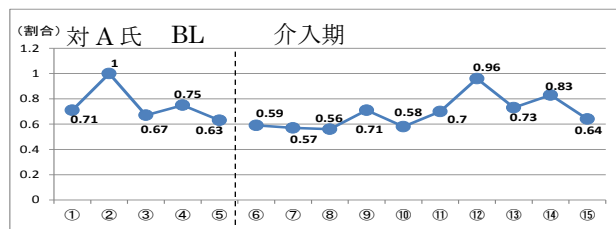


Fig.5 C氏の会話主導権の変化

介入期に発話数が増加したことから、A氏とB氏にテキストを提供したことでC氏とのコミュ

ニケーションが豊かになったといえる。しかし、C氏の会話主導権を示す数値が1よりも小さくなった試行があった。健常者に必要なスキルを教示した際に、健常者と障害者の間の会話のバランスが同等である状態を維持することが課題と言える。

2. C氏の表情（スマイル%）の変化

C氏の表情の変化を Fig.6 に示した。介入期の方が、C氏の表情を示すスマイル%の数値が高くなり、C氏の表情がより豊かであった。よって、C氏にとって介入期の方がよりよいコミュニケーションであったと考えられる。本研究のように、機械に内蔵された機能を活用し、そこから得られた数値をデータとして扱っているものはみられない。機械を活用して得られたデータの評価としての妥当性を今後も検討していく必要があるだろう。

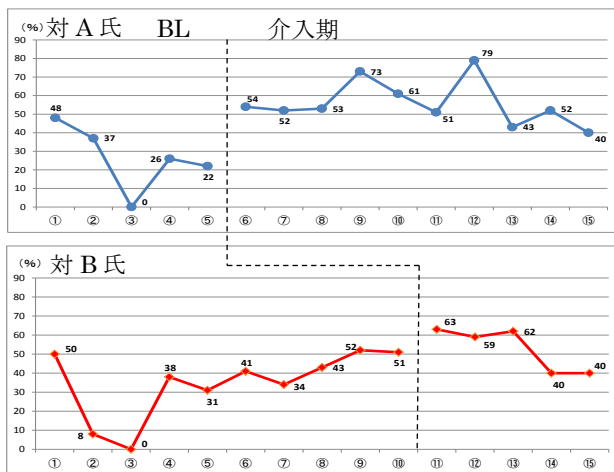


Fig.6 C氏の表情（スマイル%）の変化

3. 知的障害児（者）に対する態度調査

A氏の尺度得点を Fig.7, B氏の尺度得点を Fig.8 に示した。両者ともに3日目の「能力肯定尺度」および「交流及び共同学習尺度」の得点が下がっていた。実際に障害者と関わったことで、「何も知らない」状態と「知っている」状態では関わる側の意識が変化することを実感し、この意識の変化や気づきが、3日目の回答に反映されたものと考えられる。

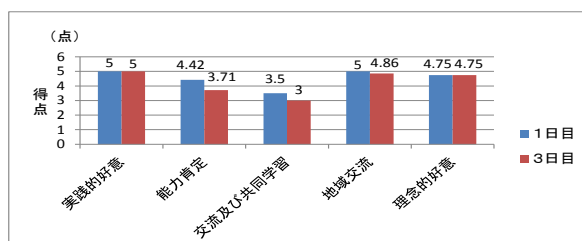


Fig.7 A氏の尺度得点

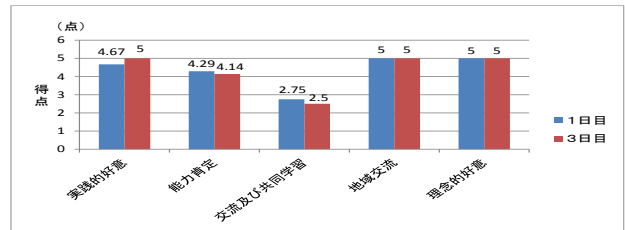


Fig.8 B氏の尺度得点

4. 自由記述式のアンケート

テキスト提供後の両者の記述に「配布されたテキストの内容を知っているかどうかで変わってくる」という記述がみられた。「何も知らない」状態と「知っている」状態には違いがあることを経験したことによる気づきと考えられる。

IV. まとめ

健常者に必要なコミュニケーションスキルを教示することは、障害者とのコミュニケーションを豊かにするために有効な手立てであったと考えられる。

本研究のプログラムは、健常者の障害に対する知識や障害児・者との接触経験の差、障害児・者の発達レベルや他の障害種における効果は保障できない。そのため、本研究で行ったプログラムの有効性についての検証は継続的に必要である。

V. 引用文献

黄憐芬 (2002) 台湾の母親のダウン症児に対するコミュニケーションスタイル—自由遊び場面と食事場面の比較を通して—。特殊教育学研究, 40 (3), 283-291.

犬飼直樹・吉泉豊晴・石川球子・野中由彦・若林功・佐久間直人・石黒豊・平川政利 (2007) 障害者雇用に係る需要の結合を促進するための方策に関する研究 (その1) [障害者雇用のミスマッチの原因と対策]。調査検討部会報告書, No.76 の1.

黒田未来・東敦子・津田望 (2002) 重度知的発達障害児への補助・代替コミュニケーション

(AAC) 指導。特殊教育学研究, 39 (5), 25-32.

大谷博俊 (2002) 知的障害児（者）に対する健常者の態度に関する研究—大学生の態度と交流経験・接触経験との関連を中心に—。特殊教育学研究, 40 (2), 215-222.